



国体の記憶 17

4歳からの一歩

このコーナーに登場してくれる人を募集します。
くわしくは広報課（☎20・1503）へ。



西川 薫さん(旧姓：甲斐)

東和田出身。4歳から空手を始め、小学6年生で黒帯(初段)取得。平成2年、千葉経済高校(現千葉経済大学附属高校)3年時に空手道「形」競技の千葉県代表として福岡国体に出場。同年、日本空手協会全国空手道選手権大会高校女子の部準優勝、千葉県高校空手道選手権優勝。中央学院大学でも空手部に所属した。

千葉経済高校時代、初代女子部員として、また県国体強化選手として全国を舞台に活躍した。種目は、相手と拳を交える「組み手」ではなく、空手技に備わる力強さや美しさを演技で魅せる「形」だ。「当てられるのも当てるのも嫌でした。根が弱虫だったんですね」と照れ笑います。

空手を始めたのは4歳のとき。有段者だった父親に、近所の道場に「無理やり押し込まれたんです」。遊び感覚で楽しめたのは最初だけ。厳しくなる一方の稽古に「もう行きたくない」と泣きべそをかいて母親に訴がる毎日。

「真冬は特につらかったです。暖房もなく、すきま風が入ってくる道場は身を切るように寒く、道着の下はTシャツ一枚。手や足が凍えて痛くて痛くて」。冷たい板の間を踏みしめる足は、霜焼けだらけだったという。

嫌々続けていた空手だったが、一人の恩師との出会いが、向き合い方を変えた。当時、市立習志野高校空手部の顧問で、名門道場「松濤塾」でも教えていた石川忠さん。数多くの有名選手を育てた名師範は、中学生だった彼



福岡国体でチームメイトと(平成2年)

女を目に留め、上段者との練習に加えてくれたのだ。そこで目にしたのは、一途に空手に打ち込む先輩たちの姿。本当に強い者だけが放つ輝きに憧れを抱き、彼らに「少しでも近づきたい」と日々鍛錬を積んだ。

心技体の力が備わり、高校に進学すると千葉県の国体強化選手に。2年時にはインターハイ、3年時には最大の目標だった国体への出場も果たした。「国体」という大舞台に立つことができたのは、ずっと続けることができたからこそ。支えてくれた恩師、先輩や仲間、そして両親に感謝しています。

現在、娘と息子の2児の母。子どもたちにも空手を?との問いに「女の子はちょっとね」と苦笑い。「でも、男の子(2歳)には絶対やらせますよ」。

編集後記

空港第2ビル駅と日暮里駅間を36分で結ぶ成田新高速鉄道“成田スカイアクセス”。この鉄道、1本が約4kmのロングレールを採用したことにより、騒音・振動が少ないとのこと。開業により、成田空港へのアクセス向上、成田と千葉ニュータウンの連携強化、将来の国際航空需要増加に対する大きな効果が期待されています。個人的には並行して整備される北千葉道路の完成も待ち遠しいですね。



成田市役所本庁舎
(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)
はISO14001の認証登録を受けています。